

目指す学校像	「地域から信頼され、地域とともに歩み、生徒・教職員一人ひとりの自己実現・Well-being が図れる学校」
--------	--

重点目標	1 質・量ともに十分なプロ授業の提供(真の学力向上) 2 明るいあいさつと笑顔があふれる学校の実現(生徒指導) 互いを尊重し、受け入れ、認め合える生徒の育成(心の教育) 3 スクール・コミュニティの確立をめざす取り組み(地域連携) 4 持続可能な新しい学校の在り方を求める教職員の育成(働き方改革)
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成	(8割以上)
	B	概ね達成	(6割以上)
	C	変化の兆し	(4割以上)
	D	不十分	(4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標							実施日令和5年2月27日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○令和3年全国学力・学習状況調査では、国語は全国平均にあと少し、数学はやや上回っており、質問紙調査では「国語は好き」と肯定的回答した生徒は全国平均をやや下回っている。「数学は好き」と肯定的回答した生徒は7割近くより全国平均を大きく上回っている。 ○授業は大変真面目に受けているが、理解度に差があり、発言等できない生徒も見られる。 <課題> ○全国学力・学習状況調査の結果から国語は書くことについてやや課題が見られる。数学は関数にやや課題が見られる。質問紙調査では、「国語の授業で目的に応じて、自分の考えが伝わるように根拠を明確にして書いたり表現を工夫して書いたりしていますか」の肯定的回答は全国平均よりやや低い。	・学びの自立化と個別最適な学習に向けた情報端末の活用 ・学ぶ意味と楽しさを実感させSDGsやSTEAMS教育への取り組みを加速	①情報端末を朝の会から立ち上げ、持ち帰りも含めた日常的使用を実施し、自己の情報獲得や表現ツールとして一層の活用を図る。 ②数学の朝学習の充実とスタディサプリやドリルパーク等の情報端末を活用した基礎学力の向上を図る。(個別最適な学び) ③総合的な学習の時間でSDGsやSTEAMSTIMEの実践を開始。 ④各教科等の年間指導計画を見直し、教科横断的に発展的学習内容を教科内STEAMS教育として位置づける。 ⑤生徒が進める授業、生徒が取り組みたい課題を解決など全教科等で生徒主体の学習活動に取り組む。(個別最適な学びと協働的学びの一体化)	①学校評価生徒アンケート「授業でできた、わかったという実感が持てたか」95%以上 ②学校評価生徒アンケート「家庭学習に取り組んでいるか」80%以上 ③さいたま市学習状況調査、国語書くこと、数学関数に関して市平均を上回る ④英検3級以上の力がある生徒80%以上 ①学校評価生徒アンケート「授業で課題を考えたり、自ら解決したりすることによく取り組めたか」90%以上 ②課題発見や解決方法など教科に特有なもの共通な手法を整理し、生徒へ提示できたか。 ③次年度年間指導計画に教科等へ教科横断的、探求活動を明記できたか。	①授業については約94%の生徒が概ねできた、わかったという実感が持てたと回答。 ②家庭学習の取り組みは生徒の68%に留まり目標値には届かず課題である。 ③ほぼ達成できたが、書くことについては課題がある。 ④英検3級取得率は70%を超え、国の調査でも相当の生徒は8割となった。 ①授業で課題解決的な学習に取り組めたと肯定的回答者は92%を超えた。 ②教科ごとに生徒による課題づくり、その解決への取り組みを整理し、研究のまとめを作成した。 ③次年度年間指導計画に教科横断的内容と探求的な問題解決学習について位置づけることを明記することができた。	B	情報端末の活用をより一層進めていく。家庭学習については目標値をかなり下回っており、日常的な家庭での学習習慣の確立に向けて、家庭の協力も得ながら進めていく必要がある。授業の進め方も家庭での課題取り組みを前提とした方法を全教科で検討していく。 教育課程全体の改善(授業時数、日課表、時程、時間割等)を検討中。社会的な課題を各教科や総合的な学習の時間の中で意図的に設定し、生徒が選んだ課題や解決したい課題を設定する探求的活動に一層取り組んでいく。例えば片柳まちづくり通信などを活用し、地域の課題を中学生として捉える活動にも取り組みたい。	学校の取り組み並びに生徒の達成については評価致します。但し、家庭学習については目標値を下回っておりますため、確立に向けて家庭の協力を得ながら進めていく必要とありますが、生徒が熱心に取り組む部活等を含め、家庭でのそれぞれの状況の違いもあり、大きな課題であると思います。情報端末の有効な活用方法については、小学校で積み上げ、習慣化されたものを引き継げるよう、小・中での連携を図っていくとよいと思われる。
2	<現状> ○令和3年全国学力・学習状況調査、質問紙「学校に行くのは楽しい」と肯定的な回答は85% 「自分にはよいところがある」肯定的回答は93%で全国平均を大きく上回っている。 <課題> ○全国学力・学習状況調査、質問紙「新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校した期間、勉強に不安を感じましたか」肯定的回答は7割を超え、全国平均を10ポイント近く上回っている。 ○心の不安を訴える生徒は増加傾向にある。アンケート調査だけでなく常日頃からの声掛け、注意深い観察、教職員同士の密な情報共有が必要である。	・学級会や生徒会、体験的活動の充実により、自己決定の場を多く設定 ・生徒一人ひとりに寄り添い、大切にす教育支援の充実	①1時間の授業の中に生徒が自己決定する場面を必ず設定し、生徒の自己肯定感や効力感を高める工夫を行う。 ②激変する社会の変化に対応したキャリア発達を促す体験的活動を工夫し、将来への展望を持たせる。(未来ワーク、未来先生等) ③地域防災、交通安全など身近な安心安全を考える体験的活動を実施。	①学校評価生徒アンケート「仲間のよさを理解し、お互いを認め合っている」96%以上。 ②未来くるワーク体験を地域の事業所で短時間でも可能な限り実施できたか。 ③一斉下校時に地域の防災拠点を確認させ、避難所訓練にボランティアとして中学生を参加させることができたか。	①98%の生徒が肯定的な回答。 ②7月に地域の事業所で職場体験を2年生で実施。また日本サッカー協会主催の元Jリーガー夢先生の講演会を実施。企業コンサルタント会社PWCによる未来の仕事に関する出前授業を1年生で実施。 ③一斉下校時に地域の防災拠点を確認。6月実施の避難所運営訓練に40名の生徒が参加。	A	生徒の自己肯定感や効力感を高めることは、学校生活のあらゆる場面での活動を通して培っていく必要がある。特に将来への希望や展望をキャリア教育や防災教育の取り組みを通して具体的に考えていく活動は効果的である。次年度も社会人講師や地域ボランティアを活用した教育活動を継続していきたい。	中学校という思春期の発達段階においても、多くの生徒が学校を楽しんでいる様子がよく伝わり、非常に良好な教育環境下にあることが分かります。特に生徒が地域の活動に関心をもち、協働で取り組む姿勢は、校長先生を筆頭に地域住民として強く感じております。中学生は地域将来への希望であるとともに、地域力の向上に寄与する存在であります。今後も学校には継続した取り組みを望んでおります。
3	<現状> ○昨年度片柳小学校と合同の学校運営協議会を立ち上げ、子どもたちの可能性を伸ばす具体的な取り組みをテーマに熟議を行った。また、学校、PTA、地域の念願であった新しい制服が制定された。 <課題> ○コロナ禍の中であって地域行事がほぼ中止となり、地域の中で子どもたちを育てる機会をどう作っていくか。 ○部活動の地域移行、片柳地区公共施設将来構想など、学校運営協議会で熟議すべき多くの課題がある。	・小中共通の発達段階を踏まえた生活や学習面でのルールづくり ・部活動の地域移行に向けた準備や公共施設の将来構想について熟議	①昨年度までの学校運営協議会や小中合同研修会での議論を整理し、発達段階に応じた生活面、学習面での共通取組事項について具体的に定め実践する。 ②片柳地区で育てていきたい子ども像を具体化するアンケートを実施する。	①学校評価保護者アンケート「学校は保護者、地域と一体となって教育活動を進めている」90%以上。 ②生活面、学習面の小中での共通指導事項が決められ実践がなされたか。	①89%の保護者が肯定的な回答。 ②片柳地区の保護者、地域の方へのアンケートを実施し、それをもとに小中合同研修会での議論がなされた。共通の指導事項として、発達の段階を踏まえたあいさつと授業規律の確保について取り組むこととなった。	A	小中共同での情報交換や共有の機会を作っていくことが、時間的制約も多く課題は多い。今後小中合同研修会の内容をさらに工夫し、学校運営協議会の委員さんともさらに細かな情報共有が必要である。	地域行事への積極的な参加に加え、パソコン部の小学校チャレンジへの派遣等新しい取組が進んだ1年でした。片柳小学校と片柳中学校の交流が活発に実施されておりますこと、大いに評価しております。特に、小学生が中学生になった時の不安解消への貢献と中学生への憧れを直に体験できることは重要です。小中義務教育一貫校の構想もあり、今後の進展にも期待しています。但し部活数が少ないことは甚だ寂しく、地域移行化等の改善策を進めていく必要があります。
4	<現状> ○ICTの活用についてはエバンジェリストを中心に研修が進み教科等での活用が図られている。 ○在校時間の縮減が図られつつあるが、働き方改革を実感できない状況が見られる。 <課題> ○情報端末のよりよい活用や機器の故障や通信障害等への対応が必要である。 ○STEAMS教育や個別最適な学びや協働的な学びの一体化に向けた授業改善について教科等の特性も踏まえた研修が不足している。 ○業務のより一層の効率化、軽減が必要である。	・ICT機器のより効果的な活用を図る研修とSTEAMS教育の研修 ・業務のより一層の効率化と削減	①ICT支援員による活用事例の紹介やICTを活用した校内授業研究会による実践の蓄積。 ②小中合同研修会でSTEAMS教育についての理解を深め、実践を行うとともに、次年度の年間指導計画を立案していく。 ③職員会議資料のペーパーレス化、会議時間の短縮、通知表所見の廃止、計画的年休や定時退勤日の確実な実施。	①学校評価保護者アンケート「学校はICTを活用しているか」90%以上。 ②小中合同のSTEAMS教育研修会が実施され理解を深めることができたか。 ③次年度のSTEAMS TIME年間指導計画に小中連携の視点を入れることができたか。 ④コピー用紙の年間使用量の20%削減。 ⑤年休取得率の20%増。	①84%の保護者が肯定的な回答。目標値には届かなかった。特に1年生保護者からの評価が低い。 ②8月に小中合同研修会を実施。 ③現在作成に向けて計画。STEAMS TIMEも含めた総合的な学習の時間の抜本的な見直しを実施予定。 ④職員会議のペーパーレス化、裏紙の活用など進めたが、12月末で10%削減に留まる ⑤2月末で昨年度比15%増。年休消化率は4割程度に向上した。(平均8日間)	B	ICTの活用については授業、校務等において進展が見られた。しかし、学校として活用について更なるPRが必要である。また機器の不具合や調整に手間取り、効果が得られないこともあり、より効率化するためにはまだ試行錯誤が必要である。業務改善については、教職員の意識改善も進みつつあり、年休取得率も向上したが、さらに進める必要がある。月1日年間12日の取得をめざしたい。コピー用紙のさらなる削減も計画的に進めていく。	教職員の働き方、労働時間の短縮について、より具体的に進めていく必要があります。ICTの活用促進等を今後も進めることに期待しています。1年生の保護者からの評価が低い理由は何故か。STEAMSTIMEを含めた取組みの抜本的な見直しを進めていただきたいです。また、ペーパーレス化については、保護者への手紙も含めて検討していくとよいと思われる。

